



病虫害防除情報

令和4年3月23日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）について

2 情報内容

イネ縞葉枯病はイネ縞葉枯ウイルスの感染によって発病する病害です。病原ウイルスはカメムシ目の一種である「ヒメトビウンカ」によって媒介されます。

埼玉県病虫害防除所では、毎年ヒメトビウンカの越冬幼虫（図1）を対象とした、保毒虫率（体内にウイルスを保有している割合）の調査を実施しています。

令和3年度に実施した調査では、県全体での保毒虫率は低いという結果が得られました。その一方で、移植時期別でみると、「コシヒカリ」など本病に抵抗性を持たない品種の作付割合が高い早期・早植栽培地域では、普通期栽培地域よりも比較的保毒虫率が高い傾向にあることが分かりました（参考）。

イネ縞葉枯病は、一度イネにウイルスが感染し発病した後では有効な対策方法はありません。昨年多くの発生が見られた地域やほ場では、感染前に早めの予防対策を実施しましょう。

参考：令和3年度ヒメトビウンカ保毒虫率調査結果
（埼玉県病虫害防除所ホームページ）

https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/bojo/data_himehodoku20220323.html



図1 ヒメトビウンカ幼虫

（1）病徴および病原の伝染方法

生育初期に感染すると、新葉が黄白色に退色し、葉身が展開せずに弓状に徒長します。このような症状は「ゆうれい症状（図2）」とも呼ばれ、発病した株は分けつが少なくなり、ひどい場合は枯死に至ります。幼穂形成期以降に感染した場合は、出穂しない、または出穂しても「出すくみ症状（穂軸や枝梗が並状に湾曲して不稔となる。図3）」となります。

ウイルスを媒介するヒメトビウンカの体内では、ウイルスが増殖し、さらに卵を通じて次世代の個体へとウイルスが伝染されます。幼虫のまま、収穫後のひこばえや畦畔雑草で越冬し、4月頃成虫となって麦類ほ場へ飛来・増殖します。



図2 ゆうれい症状



図3 出すくみ症状



図4 ヒメトビウンカ成虫

(2) 防除のポイント

ア 昨年イネ縞葉枯病の発生が多かった地域では、「彩のきずな」や「彩のかがやき」などのイネ縞葉枯病に対する抵抗性品種を作付けるようにしましょう。

イ 「コシヒカリ」や「キヌヒカリ」などの感受性品種を作付ける場合は、必ずウンカ類を対象とした箱施用剤による、ヒメトビウカの初期防除を実施してください。

ウ は種時に箱施用していない場合、育苗期間中は寒冷紗などの被覆でヒメトビウカの侵入を防ぐとともに、被覆を外した後はすぐに登録のある箱施用剤を散布してください。

エ 昨年はイネいもち病の発生が多かったので、対象病害虫にいもち病を含む箱施用剤を選定して同時防除しましょう。

表2 ウンカ類・いもち病の防除薬剤例（箱施用薬剤）

薬剤名	使用時期	混合数	IRAC、FRACコード	使用回数	用途
ヨーバルUG箱粒剤	は種時(覆土前) ～移植当日	3	IRAC :28 IRAC :9(B) FRAC:P03	1回	殺虫殺菌剤
フルスロツトル箱粒剤	は種時(覆土前) ～移植当日	4	IRAC :28 IRAC :4E FRAC:P03 FRAC:7	1回	殺虫殺菌剤
箱王子粒剤	は種前 は種時(覆土前) ～移植当日	3	IRAC :4A IRAC :5 FRAC:P03	1回	殺虫殺菌剤

(使用基準は令和4年3月22日現在)

3 IRACコード及びFRACコードの記載について

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びFRAC（同連盟殺菌剤耐性対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](https://pesticide.maff.go.jp/)から検索できます。
農薬登録情報提供システム（農林水産省）<https://pesticide.maff.go.jp/>